

<実践報告>

教員養成課程における指揮教育の手法に関する実践研究
 －アクティブ・ラーニングと e-Learning の活用を通して－

吉田治人 信州大学学術研究院教育学系

A Technique for Learning Conducting Through “Active Learning” and
 “e-Learning” in Teacher Training Course

YOSHIDA Haruto: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	教員養成課程指揮教育におけるアクティブ・ラーニングおよび e-Learning システム活用の有効性を明らかにすること。
キーワード	教員養成課程 指揮 アクティブ・ラーニング e-Learning
実践の目的	学生が自らの指揮を客観的に捉えることの重要性に気付くきっかけを提供し、それを指揮力の向上に向けての自発的な学びと結び付けられるようになるために導くことを目的とする。
実践者名	著者と同じ
対象者	信州大学教育学部音楽教育コース 3 年生 (16 名)
実践期間	2017 年 4 月～7 月
実践研究の方法と経過	授業内での指揮演習に学生間の「相互指揮」というアクティブ・ラーニング (ペア・4 人・8 人でのグループ演習) を取り入れた。授業内での各学生の指揮をビデオ撮影した動画を e-Learning (eALPS) 上にアップロードし、学生が動画を視聴した後、コメントを書かせ、その内容から学生の指揮に対する意識の変容を把握した。更に授業アンケートを実施し、その回答結果をもとに、これらの実践の有効性を検証した。
実践から得られた知見・提言	学生は学生同士の相互指揮および、それに伴う相互アドバイス、また動画視聴から、自らの指揮を客観視することの重要性に気づけたと考えられる。その認識を基に、指揮をする側と指揮される側の双方の視点から「良い指揮」、「指揮者」とはどうあるべきかを模索しつつ習練に励む意欲が出たと思われる。それにより、実際の指揮力向上にも結び付いたといえる。

1. はじめに

一般に音楽大学において指揮者を目指す学生を対象に、指揮者として養成することを目的とした教育を施すのに対し、教員養成課程においては、音楽に携わる教員として教壇に立つことを目標とする学生の指揮力を向上させる教育を施すことにあると考えられる。

信州大学教育学部音楽教育コース（以降、音楽科と記す）においては、指揮を学ぶ機会として平成 29 年度には 3 年次生の必修科目である「指揮法基礎」（前期）、及び 3・4 年次生の選択科目である「指揮法演習」（後期）が開講されている。音楽科の学生が在学中に指揮を学べる期間は、これらの両科目を履修しても実質 8 ヶ月（30 回）、必修科目の「指揮法基礎」のみの履修者に至っては実質 4 か月（15 回）と、いわゆる音楽系大学の「指揮科」とは比較の対象にならないほど短い。

また、同学部の卒業要件として平成 24 年度より小学校および中学校の両教員免許取得が必須となってからは、履修科目が増加し、音楽科の学生にとっては毎日の大学生活の中で音楽に意識を向ける時間を確保するのにも一苦勞するという状況である。そのような中で、音楽に意識を向ける時間が確保できると、やはり、まずは授業展開には欠かすことのできないピアノと声楽の練習に時間を割くこととなり、指揮の練習にまで手が及ばないことは容易に想像できる。このような状況の中で、限られた期間で履修生にどのようなことを習得させるかは、教員側にとっては重要な命題となる。

これまで授業内容の吟味とそれを遂行する手法について、試行錯誤しながら授業を行ってきた中で、以下に示す 2 つの問題点が浮かび上がってきた。

まず、指揮の指導は、指導者と学習者による「1 対 1」での個人レッスンが理想的であるが、本大学においては、カリキュラム上、音楽教育コースの 3 年生全員が履修生となるため、時間的な問題から「1 対多」の形態での指導を余儀なくされることである。

筆者がベルリン滞在中に師事していたカール・ビュンテ（C.A.Bünte）氏のプライベートレッスン、また、聴講生として在籍していたベルリン芸術大学（現 Universität der Künste Berlin）指揮科のビュンテ氏のクラス（1987 年当時 5 名）においても「1 対 1」での個人指導が実施されており、各学生のレベルに応じた内容の指導がなされていた。一方、本学においても実施している「1 対多」の形態での指導では、「1 対 1」で行うような学生一人一人に対してきめ細やかな指導を施すことは極めて困難である。

次に、「指揮法」そのものに関しては、多種多様なメソッド本が存在しており、その内容については各著書内で詳細に示されてはいるが、実際に学習者、特に初心者に対してどのように指導を展開していくかの議論、特にグループ指導のノウハウについては十分に提示されているとはいえないことが挙げられる。

そこで本研究では、初心者に施す指揮教育のグループ指導として、「学生同士のアクティブ・ラーニング」と「e-learning の活用」の 2 つのアプローチによって行った「1 対多」での授業実践の一例を示し、授業アンケート調査の回答結果をもとに、その有効性を明らかにすることを目的とする。

2. 実践の概要

2.1 実践対象と実践期間及び授業カリキュラム

本実践は、2017年度前期第5時限に信州大学教育学部音楽教育コースの3年生(16名)を対象に開講されている必修科目「指揮法基礎」(全15回)の授業内で行った。以下に履修生に最低限取り組ませたい指揮要素項目及び授業日程・内容を示す(表1, 2)。

表1 授業で取り組ませる指揮要素項目

①指揮の加減速運動と打点の感受
②拍子図形について(2拍子, 3拍子, 4拍子, 変拍子, 分割)
③予備拍について(4拍子の1拍目, 2拍目, 3拍目, 4拍目からの開始および, それらの裏拍からの開始, テンポ・デュナーミクを含んだ予備拍提示)
④「sf」表示の指示, 及び「数取り」
⑤フェルマータ, 段階的速度変化(accel., rit.)等のテンポ変化練習
⑥音量変化, キャラクター変化(marcato, legato, leggero等)
⑦シンコペーション(裏拍の出し方)
⑧楽曲指揮実践

表2 授業日程及び内容

回	授業実施日	演 習 内 容
1	4月4日	・指揮の概念についての講義 ・打点感受(1拍振り) ・拍子打ち(1・2・3・4拍子)
2	4月11日	・予備拍について(4拍子の1拍目, 2拍目, 3拍目, 4拍目からの開始)
3	4月18日	・予備拍提示のペア・4人でのグループ練習
4	4月25日	・テンポ, デュナーミクを含んだ予備拍提示
5	5月2日	・中間実技試験(1・2・3・4拍子の拍子打ち) ・テンポ, デュナーミクを含んだ予備拍提示の8人グループ練習
6	5月9日	・sf表示の個人・ペア・4人グループ練習
7	5月16日	・sf表示の8人グループ練習
8	5月23日	・デュナーミク変化および各拍からの開始の要素を含んだ8小節のフレーズ指揮(ペア・4人グループ練習)
9	5月30日	・5/23の内容の8人グループ練習 ・フェルマータを含んだ8小節のフレーズ指揮(ペア・4人グループ練習)
10	6月6日	・アッチェレランドを含んだ楽曲(ロシア民謡「カリンカ」)のペア・4人・8人グループ練習 ・途中でテンポ変化する8小節のフレーズ指揮(ペア・4人グループ練習)
11	6月13日	・①強弱 ②fp ③デュナーミク変化+段階的速度変化(accel., rit.)等のテンポ変化を含んだフレーズ指揮(ペア・4人・8人グループ練習) ・音量変化, キャラクター変化(marcato, legato, leggero等)を含んだ8小節のフレーズ指揮(ペア・4人グループ練習)
12	6月20日	・楽曲指揮のペア・4人・8人グループ練習 「ぶんぶんぶん」「春の小川」「ふるさと」「証城寺の狸囃子」「山の音楽家」 ・実技試験曲指揮「帰れ, ソレントへ」(ペア・4人・8人グループ練習)
13	7月4日	・実技試験曲指揮(4人・8人グループ練習)
14	7月11日	・実技試験曲指揮(4人・8人グループ練習)
15	7月12日	・実技試験曲指揮(4人・8人グループ練習) ※教育実習週分の補講
16	7月18日	・実技試験および総括

2.2 実践に活用したシステム

(1) アクティブ・ラーニング

「指揮法基礎」の授業において教員1名が16名の学生に対して90分という時間枠内で個別指導を行うとすると、単純計算で1人当たりの指導時間は約5分間となり、指導を受けていない時間を過ごす学生が常に15名出てしまうため、実質的に不可能である。

また、教員が1つの課題に対して手本例を示し、それを全員に一斉に練習させる指導だけでは、指揮を指揮者の視点からのみ捉えてしまい、対象者不在の一方通行の指揮練習になってしまう恐れが生じる。

指揮を学ぶ上で、学習者自身が指揮技術を習得することと、その指揮により奏者・唱者から、より音楽的な演奏を引き出す、という2つの観点から研鑽する必要があることから、手が動くようになるための練習を重ねるだけでなく、その指揮が演奏者に対して、より良い演奏を引き出す力を持つように導いていくことが重要なポイントである。

そこで「指揮をする側」(指揮者)と「指揮をされる側」(唱者・奏者)の双方の視点から捉えた「良い指揮」を目指すことと、時間枠内で可能な限り1人当たりの指揮時間を長く確保するために考案したのが、学生同士で行わせるペア・4人・8人でのグループ練習である。この練習により、筆者からの一方的な指導にならず、学生同士の自発的な学びが期待できると考えた。

(2) 信州大学 e-Learning システム“eALPS”

指揮の習得には自らの指揮する姿を腕の動きとともに客観的に確認することが効果的であるが、それを履修生に行わせる手法が問題となってくる。

今日のようにビデオカメラが普及する以前は、鏡に自分の姿を映して見ることしか手立てがなかったが、現在はビデオカメラやスマートフォン等で手軽に自己の指揮を撮影し、その場で確認・分析することも可能とはなった。しかしながら個人単位では、なかなかうまく行かない。当初は、筆者が授業中に録画した全履修生の指揮の動画を授業内にモニターに映し出していたが、視聴時間がかかり授業時間が割かれ、非効率的であった。

そこで筆者は、本学の e-Learning システム“eALPS”上へのビデオ撮影動画配信に思い至った。その他、学生へのコメント発信および学生からのコメントへの返信、授業アンケート調査等の機能を活用した実践も行った。

3. 実践の内容

3.1 アクティブ・ラーニングの実践

(1) ペア練習

1つの課題を一定時間自分なりに練習する時間を取った後に、アトランダムに着席している16名の学生を向かい合わせペアにし、1対1での相互指揮を行う。本来、演奏時に1対1で指揮をする状態になることは考えられないが、まずは対象を最少人数の1名に限定して「相手に向かって指揮する」ことを体験させた(図1)。



図1 ペア練習風景

「唱者が自分の思い通りに歌ったか」を分析し、指揮をされる側は「今の指揮で歌いやすかったか」、「もっとこのように指揮してもらえると歌いやすくなる」などと分析し、それを相手にアドバイスすることで、お互いの指揮を向上させることができた。

(2) 4人練習

ペア練習を発展させて4人1グループで行う(図2)。ここでは、指揮する側と指揮される側が「1対3」の関係になるため、指揮者は3人の唱者の歌声をタイミング的にもニュアンス的にも「揃わせる」ことを念頭に置く必要が出てくるため、より実践的な指揮が



図2 4人練習風景

指揮をする側は自分の感じている音楽を相手に代わりに歌ってもらいながら、自分の思った通りの歌唱になるように導くための指揮をし、指揮をされる側は相手の指揮の発する導きにより、自分の思っている歌を歌っていく。この際、指揮をする側は「自分がどんな指揮をしたか」ではなく、

「唱者が自分の思い通りに歌ったか」を分析し、指揮をされる側は「今の指揮で歌いやすかったか」、「もっとこのように指揮してもらえると歌いやすくなる」などと分析し、それを相手にアドバイスすることで、お互いの指揮を向上させることができた。

学べた。また、アドバイスも3人の唱者からそれぞれ異なった視点からもらえるので、参考になる材料も増える。アドバイスした側も、そのアドバイスを自分の指揮に反映させることができると同時に、他の3人の指揮の良いところを自分の指揮に取り入れることができるという利点もある。

(3) 8人練習

4人練習よりも更に人数が増えることで、小規模ながらも「1対多」での形態で合唱指揮が実践できた。指揮課題によっては指揮者1人、ピアノ奏者1人、合唱6人という構成で、8人がローテーションを行うことで各学生が3つの「役」を体験することができ、それぞれの側の視点から指揮を捉えることを可能にする。学生は、指揮者の立場では、6人の合唱とピアノ伴奏がタイミングを合わせる事が可能であり、なおかつその課題の音楽的ニュアンス(テンポ、ダイナミクス、表情等)を把握できる予備拍提示に始まり、終結に至るまでの指揮を学び、ピアノ奏者、合唱の立場からは指揮者の指揮を「観察」し、気づいた問題点を指揮者にアドバイスし、それを自らの指揮にも反映させるという相互学習ができた。

尚、各グループ練習に入る際には、それぞれの課題において予め個人練習の時間を十分に取り、各自で個人レベルでの試行錯誤をさせておくことが前提となる。

3.2 e-Learning システム“eALPS”の活用実践

(1) 動画の学生への公開

毎回の授業の最後にまとめとして撮影した動画のアップロードを信州大学教育学部 e-Learning センターに依頼し、アップロード完了の連絡を受けた後に全動画をチェックし、それに対しての総評コメントを付け、学生が閲覧可能な状態にする (図 3)。



図 3 “eALPS” 動画表示画面

学生はアップロードされた各自の動画をチェックし、筆者のコメントを踏まえた上で、自分の指揮の問題点および成長した部分を把握する。また自分以外の学生の指揮の動画を「指揮される側」に視点で見ることで、客観的にその指揮の長所・短所に気づき、自分の指揮に反映させることができた。

この際、動画名は学生名を表示させずナンバリングのみとする。かつて学生名を表示していたところ、自分の動画のみ視聴する学生が複数いたことから、e-Learning センターと協議した結果である。後に示すアンケート結果より、学生からは改善要望があったが、これにより自分の指揮だけでなく、お互いが他の学生の指揮を観察する機会が増え、良いところとそうでないところに気付くことができ、自らの指揮に反映させられるのではないかと考えてのことである。

(2) コメントのやり取り

学生が、指導者からのコメント及び自分や他の学生の動画を見ることで気づいた自分の問題点および良い点に関するコメントを指定のフォーラムに書き込み、そのコメントに指導者が再度返信コメントを書きこむというやり取りを行った (図 4, 5)。



図 4 “eALPS” コメント一覧画面



図 5 “eALPS” コメント画面

コメントをやり取りすることを通して、学生にとっては動画を見て感じたことを文字にすることで自分の指揮の問題点を再認識できることと、指導者にとっては学生自身が感じている問題点の一部を文字から読み取れることが利点として挙げられる。

授業回によって多少のばらつきがあったものの、1回当たりの授業フォーラム内の平均動画視聴者数は 13.6 人/16 人、コメント閲覧数の平均は 196.6 回となった (表 3)。

表3 フォーラム閲覧回数

授業回	閲覧者数	閲覧総回数	授業回	閲覧者数	閲覧総回数	授業回	閲覧者数	閲覧総回数
1	15	245	6	15	166	11	16	154
2	16	313	7	16	221	12	12	130
3	15	265	8	15	177	13	14	135
4	16	370	9	14	112	14	フォーラム開設せず	
5	14	185	10	15	202	15	13	78

以下にフォーラム内に書き込まれた学生のコメントの一部を示す(表4)。

表4 学生の動画視聴後の書き込みコメント例(抜粋)

<p>【打点】自分の指揮を客観的に見ることは、大切だなと感じました。</p> <p>【指揮を客観的に見て】ビデオを見てみて、自分が思っていた以上に打点のはっきりしておらず、振り方も小さくて驚いた。もっと大きさに、見ている人に伝わりやすい指揮をできるように努力したい。</p> <p>【感じたままに振る】授業では隣の人と指揮の見合いっこをして意見を言い合うということをしました。(～中略～)友達とお互いに意見を交換することは、自分ではわからない客観的な改善点分かるし、友達の改善点を見つけるうちに自分ではできているだろうかと考えるので、一石二鳥だなあと思いました。</p> <p>【常に奏者に向けた指揮を】初めて指揮棒をもって指揮をしてみた。指揮棒を持って指揮をしてみたのを客観的にみると、今までの腕の振り方や拍の感じ方がさらに甘くなり予備拍がほとんど分からないと思った。自分が思っている以上に大きく表現することに加え、奏者にどのように入ってもらいたいか考える必要があると考えた。</p>

4. 授業アンケート

「指揮法基礎」履修者16名(女子14名,男子2名)を対象に,授業アンケート調査を行った(7月実施)。設問内容及び回答(抜粋)は以下に示すとおりである。

<p>Q1 これまでの授業で取り組んできた課題を習得できましたか。(5肢選択)</p> <p>・そう思う: 4 (25.00%) ・まあまあそう思う: 12 (75.00%) ・どちらでもない: 0</p> <p>・あまりそう思わない: 0 ・まったくそう思わない: 0</p>
<p>Q2 比較的習得できたと思う課題を挙げて下さい(複数可)。(自由記述)</p> <p>・指揮の基礎, 基本的な形, 振り方 ・拍子の図形・分割, 拍の取り方</p> <p>・円運動を意識しながら振ること ・一拍前に次の表現の指示を出すということ</p> <p>・曲のニュアンス提示 (sf やアクセントの出し方) ・奏者を促す</p> <p>・様々な要素を含んだ指揮 (例えば, フェルマータや rit., 強弱, スラー等)。</p> <p>・指揮をするということは, 自分の中の思いがあることが前提であり, それが意思を持って指揮できるということ。</p>
<p>Q3 まだ不十分だと思う課題を挙げて下さい(複数可)。(自由記述)</p> <p>・打点をぶれないように指揮を振ること ・テンポ表記が変わった時の振りの変化</p> <p>・曲の中での予備拍の出しかた ・体がぶれる ・場面に応じたダイナミクスの表現</p> <p>・マルカート, テヌート, スタッカートの違い ・音楽を感じることに, 表現力</p> <p>・指揮で曲の雰囲気・ニュアンスを指揮に反映できない。 ・単調な指揮になってしまう。</p> <p>・歌詞の内容と対応した指揮が, 自分の指揮ではまだ表現しきれしていない。</p>
<p>Q4 取り扱ってほしい(ほしかった)と思う内容があれば記入してください(自由記述)。</p> <p>・拍を取らない左手をどううまく使うか, 知れると良かった</p> <p>・授業の時間的に厳しいかもしれませんが, もう少し実際の曲を題材として課題を行う機会があると良かった。 ・オーケストラの振り方をもっと学びたかった</p>

<p>Q5 アクティブ・ラーニング的側面を持つ「ペア・4人・8人」でのグループ練習は効果的だと思いますか (5肢選択).</p> <p>・そう思う : 13 (81.25 %) ・まあまあそう思う : 2 (12.50 %) ・どちらでもない : 1 (6.25 %) ・あまりそう思わない : 0 ・まったくそう思わない : 0</p>
<p>Q6 ペア練習の効果的・非効果的な面を記入して下さい (自由記述).</p> <p>【効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交互に指揮と演奏者をやることで、両者の視点を持つことができる。 ・自分では気づかなかったことを指摘してもらえる (客観的意見を得られる) し、自分も相手をよく見て、どうするともっと良くなるか考えることができる。 ・仲間の良いところをどんどん取り入れることができる。 ・1対1だから、照れを感じることなく指揮が振れる。 ・友達の指揮へ指摘していることが自分にも当てはまることもあり、良い刺激になる。 ・相手の良いところや直したいところを言い合いながら、時間内で繰り返し練習し合える。 <p>【非効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他のペアの人の振り方などが気になって気が散ってしまっていた面がある。 ・音量などの変化がわかりにくい。 ・あまり相手に言えない。 ・相手のやる気が無い時に、あまり練習にならない。
<p>Q7 4人練習の効果的・非効果的な面を記入して下さい (自由記述).</p> <p>【効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色々な人の指揮を参考にできる ・互いに意見を交わしながら検討し、何度も練習できる ・自分の指揮に対して多数の意見が聞けるし、他の人の参考になる部分を自分に取り入れられる。 ・ペアよりも音量の変化が聞き取りやすい。 <p>【非効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の番が回ってくるのに少し時間がかかる。 ・2人に比べて意見が少ない。 ・4人だとただお互いの指揮を見合うだけになってしまった。
<p>Q8 8人練習の効果的・非効果的な面を記入して下さい (自由記述).</p> <p>【効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大勢に向けて指揮を振る練習になる ・緊張感を味わえる。 ・自分の指揮に対して様々な意見をもらえ、他の人の指揮を見て参考にすることができる。 ・合唱形態での指揮に慣れることができる。 ・より実際に人前で振るという経験ができる ・遠くの人や全員に分かりやすい指揮をする練習になる。 ・より歌わせようという思いが出て指揮ができる。 ・大きい編成で隅々まで目を行き届かせる練習ができる。 ・ある程度の前で振ることで、自分の指揮がどのように受け取られるかわかる。 ・演奏者が多い分、本番を想定した練習をすることができる。 <p>【非効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ただ振るだけで、欠点を見つけ辛い。 ・人数が多いのでだれてしまう。 ・歌っている人がだいたい速度や強弱を理解しているため、指揮を見て変化しているのかそうでないのかわからない。 ・人数が多いことで、1人当たりの練習時間が少なくなる
<p>Q9 授業内での指揮演習の動画配信は必要だと思いますか? (5肢選択)</p> <p>・そう思う : 7 (46.67 %) ・まあまあそう思う : 8 (53.33 %) ・どちらともいえない : 0 ・あまりそう思わない : 0 ・まったくそう思わない : 0 (無回答 : 1)</p>
<p>Q10 授業内での指揮演習の動画配信は自らの学びに役立っていると思いますか。 (5肢選択)</p> <p>・そう思う : 7 (43.75 %) ・まあまあそう思う : 9 (56.25 %) ・どちらともいえない : 0 ・あまりそう思わない : 0 ・まったくそう思わない : 0</p>
<p>Q11 動画配信の効果的・非効果的な面を記入して下さい。</p> <p>【効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の指揮を客観的に見て、改善すべき点を見つけることができ、次へ繋げることができる。 ・自分の指揮といいなと思う仲間の指揮を見比べ、何が自分に足りないのか考察する時間が持てた。 ・何度も再生することができる。

<ul style="list-style-type: none"> ・うちで鏡を見ながらやるより、緊張感や集中した様子が見られるので実際に指揮することを想定できる。また過去からどうなっていたのか成長が自分で見られる。 <p>【非効果的側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強制力が強い ・(動画の)名前がないと自分の動画を探しづらい。 ・一つ一つ見終わったら次の人…と画面を開きなおさないといけないのが結構手間だと感じた。 ・毎回でなく、1週ごとでも良いかもと思う。 ・練習風景の動画もあればいい。 ・たった一回の指揮しか見られないので、うまくできなかった時になんとも言えないことです。
<p>Q12 あなたの毎回の授業に対する復習時間を時間(分)単位で答えて下さい。(半角数字で回答してください。)</p>
<p>・10分:1人 ・15分:1人 ・20分:2人 ・30分:5人 ・60分:2人 90分:3人 ・120分:1人 (無回答:1人)</p>
<p>Q13 これまでこの授業を受けてきて、あなたが出来るようになったことや、学んだことを書いて下さい。(自由記述)</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・今まで指揮の形にばかりとらわれていたが、それよりも自分がどのような音楽にしたいかが大切で、そのイメージがないとよい指揮にはなりえないことに気づいた。 ・指揮はただ手を振るだけでなく、楽器や歌と同じように技術が必要であること。 ・指揮をするための基本的なこと、指揮に合わせる伴奏や歌もだいぶできるようになった。 ・予備拍を特に大事にして、歌う人が入りやすい振りをすること。 ・基本的な指揮の振り方 ・曲の雰囲気振り方や表情で表現すること。 ・友達の指揮を見て、良いところや悪いところを指摘すること。 ・指揮で学んだこととして音を出さずに自分のしたい音楽を表現するというものがある。これは今まで音を出すものしか知らなかった私にとって新鮮だった。また難しくもあった。自分がしたいと思う音楽がどうしたら奏者に伝わるのか。伝えるために予備拍を出したり、分割したり様々な方法を使うことを知り、その中のいくつかは習得できたと思う。基礎の基礎はできるようになったのではないだろうか。 ・より歌い手や奏者のことを考えて振るようになった。 ・楽譜に書いてあることを表現しようとすることも大事だが指揮者がどのような音楽を描いているかで自然と指揮に表われてくることを学んだ。 ・楽譜の表記に今まで以上に神経を使うようになった。歌とかと同じで、自分の中に確固たる音楽や意志が無ければ指揮はできない、ということ学んだ。 ・指揮は動きができればいいのではなく、自分の中に音楽的な変化を感じていなければうまく振れないこと。 ・指揮をするための息づかいや心構え、技術を学ぶことができた。 ・人前で指揮や「こうしてほしい」と表現することにに対して、恥ずかしさをあまり感じなくなった。初めは、指揮はただ拍子と速さと強弱を示すしか思っていなかったが、予備拍や表情、ニュアンスなど、より細かいことを指揮は含んでいると学んだ。 ・少し自信をもって指揮をすることができるようになった。
<p>Q14 あなたがピアノ・声楽の授業に臨む際にあたり、週に練習する時間を時間(分)単位で答えて下さい。(ピアノ・声楽それぞれの練習時間を半角数字で回答して下さい。)</p>
<p>(A) 300/60 (B) 105/210 (C) 180/180 (D) 60/60 (E) 120/160 (F) 120/120 (G) 240/240 (H) 420/300 (I) 300/300 (J) 90/90 (K) 180/120 (L) 180/60 (M) 1080/180 (N) 300/300 (無回答2人) ※括弧内アルファベットは学生仮称、ピアノ/声楽(分)</p>

5. アンケート調査結果の分析と考察

Q1~4は、授業内容に関する問いである。「授業で取り組んできた課題を習得できたか」との問いに、履修者全員が「そう思う」(4)、「まあまあそう思う」(12)と、概ね「習得できた」と回答した。「取り扱ってほしい内容」として「実際の曲を課題としてほしい」旨の回答があり、指揮課題選定に関しては、今後の検討課題としたい。

Q5~8は、アクティブ・ラーニングに関する問いである。「グループ練習は効果的だと思うか」との問いには、「そう思う」(13)、「まあまあそう思う」(2)と、ほぼ全員が肯定的

な回答をした。一方、ペア練習において「相手のやる気が無い時に、あまり練習にならない」こと等が、その他のグループ練習においては「人数が多いことで、一人当たりの練習時間が少なくなる」こと等が短所として挙げられているが、効果として「指揮者と演奏者の双方の視点が持てる」ことや「時間内に何度も練習できる」こと等が多数の学生から挙げられている。

Q9～11は、“eALPS”の活用に関する問いである。「動画配信の必要か」の問いには、「そう思う」(7)、「まあまあそう思う」(8)と無回答を除いては全員が肯定的な回答をした。また「動画配信は自らの学びに役立っていると思うか」の問いにも「そう思う」(7)、まあまあそう思う(9)と全員が肯定的な回答をしており、「客観的に自分の指揮を見ることができる」、「仲間の指揮と比較できる」こと等を挙げている。このことは、指導者が一方的に手本を示し、学生がそれを個人で練習するという授業形態ではできない、自発的な学生同士の学びが実現しているということを示しているといえる。一方で「視聴に際しての手間」や「強制力」等、マイナス面への言及もあるため、対処が必要である。

Q12・Q14は指揮とピアノ・声楽に当てる練習時間に関する問いである。ピアノと声楽の練習時間に対し、指揮は120分1人、90分3人、60分以下が11人と圧倒的に少ないことが分かった。この実態に対しても、“eALPS”を活用した時間外学習の時間を取ることで、指揮に取り組む時間を増やすことに多少なりとも効果を上げているといえる。

前後するが、Q13「授業で学んだこと」に関する問いに対しては、「指揮の基本的動作」や「予備拍提示等」等の技術的な学びに加え、本研究の核心ともいべき事柄である「指揮は動きができればいいのではなく、自分の中に音楽的な変化を感じていなければうまく振れないこと」や「初めは、指揮はただ拍子と速さと強弱を示すとしか思っていなかったが、予備拍や表情、ニュアンスなど、より細かいことを指揮は含んでいると学んだ」、更に「指揮は動きができればいいのではなく、自分の中に音楽的な変化を感じていなければうまく振れないこと」等を「学べたこと」として挙げていることに、学生の指揮への理解が深まったことが表れている。

6. おわりに

教員養成課程の学生に、限られた時間の中でいかに多くの指揮体験をさせ、学ばせるかをテーマに、アクティブ・ラーニングとe-Learningシステムの活用を導入した。アンケートのQ13への回答にみられたように、指揮技術の習得とともに、学生に「あるべき指揮」についての概念が宿ったことが窺えたことが意義深いと考える。また、アンケート回答の内容とともに、学生の指揮実技の成長ぶりからも、これらのシステムが有効に機能したと考えられる。一方で、課題も浮き彫りとなった。今回は、授業手法に重点を置く実践研究となったが、今後は、教員養成課程における指揮指導内容の更なる検討も課題としていきたい。

(2017年8月21日 受付)